

# ブランキと「資本主義」

— 「資本主義」語のはじまり (3) —

重 田 澄 男

はじめに

## I. ブランキ

1. 人物と社会的活動
2. 『社会批判』における「資本主義」語
3. ブランキとマルクス

## II. 19 世紀後半の「資本主義」語

1. 19 世紀後半期の諸文献
2. 「資本主義」語の普及

はじめに

「資本主義」という用語は、これまで見てきたように<sup>1)</sup>、1850 年前後の時期にピエール・ルルーやルイ・ブランやサッカレーなどによって使われはじめたものである。

ところで、「資本主義」語を使いはじめた著者、文献、年次等について示しているパソウやデュボアや *Oxford English Dictionary (OED)* についても、その後しばらくの時期すなわち 1850 年代から 60 年代にかけては「資本主義」という用語を使った文献はほとんど挙げられていない。かろうじて、1869 年に、ブランキが『社会批判』なる文献において「資本主義」なる言葉を使っていると、デュボアの『フランスにおける政治的・社会的用語集 1869-1872 年』が指摘<sup>2)</sup>しているだけである。デュボアのみならずパッ

ソウや OED をも含めて 1850 年前後のもの以後に挙げられている文献はブランキを除くとすべて 1870 年以後となっている。

ブランキが「資本主義」語を使ったとされる 1869 年といえば、マルクスが『資本論』第 1 巻を刊行した 1867 年の 2 年後のことである。

マルクスにおける「資本主義」語あるいは〈資本主義〉概念とその用語法については今後の検討にゆだねることとして、ルルーやルイ・ブランやサッカレーが使いはじめた「資本主義」という言葉が、『資本論』が出版された頃までどのような使われ方をしていたかについての事例として、本稿では、ブランキにおける「資本主義」語の使い方について点検しておくことにしたい。

## I. ブランキ

### 1. 人物と社会的活動

ルイ・オーギュスト・ブランキ (Louis-Auguste Blanqui, 1805-81)<sup>3)</sup> は、19 世紀のパリの民衆蜂起と革命のほとんどに直接あるいは間接に関与し、76 年の生涯のうち通算すると 33 年 7 カ月ものあいだ獄中にあり、拘束・監視付強制居住・追放または警察の監視等の約 10 年を合わせると 43 年 2 カ月ものあいだ不正常を強いられた生活を過ごし、政府権力には恐れられたが、民衆には「幽閉者」「殉教者」と呼ばれて尊敬を集め、多大の影響をおよぼした革命家である。

ブランキは、1805 年に、イタリア国境に近い南仏ニース北方の小都市ピュジェーテニエに生まれる。したがって、1811 年生まれのリイ・ブランや 1797 年生まれのピエール・ルルーとはほぼ同世代の人物である。父は元ジロンド派の国民公会議員で、当時は郡長、兄ジェローム・アドルフは J. B. セーの

弟子であり自由主義的経済学者である。

1814年のナポレオン退位とともに、父は職を失い、家族は強制立退きのためそれまで暮していた土地を離れることを余儀なくされて、一家は苦境におちいった。その後の王政復古期には、母が相続した叔母の遺産でなんとか生活したといわれている。

1818年、ブランキは、兄が復習教師をしていたパリのマッサン経営の寄宿学校に入り、リセ・シャルルマーニュに学ぶ。1822年「自由万歳！」と叫びながら殺された共和派秘密組織「カルボナリ」(Carbonari, 炭焼党)の4人の軍曹の処刑を目撃して衝撃を受け、社会への批判に目覚める。1824年にリセを卒業、この頃、「カルボナリ」に加入。一時パリを離れるが、1826年にパリに戻り、マッサン寄宿学校の復習教師をしながらソルボンヌの法学、医学課程の試験準備をする。

1827年学生デモに3度参加、3度負傷。1829年、ピエール・ルルーが編集者をしていながらまだ中庸派的傾向にあった『グローブ』(*Le Globe*, 地球)紙の速記者となる。だが、翌1830年、7月革命とともに『グローブ』紙を離れ、市街戦に参加した。

7月革命の「栄光の3日間」にもかかわらず王権の交代にすぎないかたちで成立することになったルーフィリップの7月王政に怒りを感じたブランキは、急進的な共和主義者の結社「人民の友協会」の反政府運動に参加し、1831年1月ソルボンヌの学生の反政府デモに参加、学生連合委員会の宣言を起草、学生登録資格剥奪処分を受け、逮捕投獄され、さらに、1832年政府批判の文書出版を口実とした〈15人裁判〉によって禁錮1年罰金200フランの刑を受ける。

この時期、バブーフの流れをくむブオナローティが亡命先のベルギーからパリに帰ってきていて、ブランキは平等主義者の伝統と半世紀にわたる体験を聞いて感銘を受け、地下運動の実践とその技術的戦術について学び、働く者の政府をつくる信念を固めたといわれている。

1834年『リベラトゥール』(Le Libérateur, Journal des Opprimés, 解放者)紙を発売、秘密結社「家族協会」に参加する。1836年、「家族協会」による弾薬密造が発覚して逮捕され、禁錮2年罰金2000フランの刑に処せられる。1837年恩赦を受け、以後ジャンシでの監視つき強制居住となる。

この頃、革命組織「四季協会」を組織。1839年5月12日、パリで「四季協会」による武装暴動をおこしたが、警察と軍隊によって打ち砕かれて失敗し、10月に逮捕されて死刑判決(無期刑に減刑)、モン-サン-ミシエルの獄につながれた。過酷な獄中生活で病になりトゥールの施療院に移される。1844年12月のルー-フィリップの恩赦令にたいしてブランキはこれを拒否する。1847年6月出獄後ブローアで強制居住生活。

1848年、2月革命の報を聞き、共和派と社会主義者とによる臨時政府の成立したパリに戻って、一般には「ブランキ・クラブ」と呼ばれた「中央共和協会」を設立した。同年3月31日、政論記者タシュローが発行しているルヴェ・レトロスペクティヴ『回顧誌』に、ブランキが1839年に同志を裏切った尋問陳述を内務大臣にしたという内容の「1839年5月12日事件」と題する「タシュロー文書」なる誹謗文書が掲載されて、多くの仲間たちの疑惑と離反をまねく。

さらに、4月の選挙で社会主義派が後退するなかで、ブランキは、同年5月15日パリのデモ労働者による国会乱入と議会の解散を宣言した事件に連座して5月26日逮捕され、またしても獄につながれた。このため、6月23日に始まった、国立作業所の解散をもくろんだ政府の措置に憤激したパリ労働者による蜂起と多くの犠牲者を出した〈6月事件〉のときには獄中であって、蜂起の指揮をとることができなかった。1849年、〈5・15事件〉裁判で10年の独房拘禁の刑を受ける。主としてベル-イール-アン-メールの懲治監に閉じこめられた後、1859年4月に刑期は終了するも、ナポレオン3世政府はブランキをさらにマルセーユの監獄につれもどし、ラマルグ要塞等を経てアフリカのアルジェリアにあるマスカラの流刑者収容所に拘禁する。

1859年8月ブランキは恩赦令によってやっと釈放されて自由の身になり、

パリに帰る。その12月にロンドンに旅行する。

1860年6月パリに帰るが、翌61年3月秘密結社と非合法出版を口実として逮捕、4年の禁錮刑を受け、マザス監獄に入獄。12月サントーペラジ監獄に移され、以後、第2帝政の60年代半ばまで獄中にあった。この1862-64年の時期に、面会日が週2回あって監視がゆるやかであったサントーペラジ監獄に出入りしていたトリドン、シャルル・ロンゲなど多くの若者たちに多大の影響を及ぼしたといわれている。

1865年8月、病気のため獄中より送られたネッケル病院から脱走してベルギーに逃れる。そこで、1868年には、国際労働者協会(第1インターナショナル)の第3回ブリュッセル大会に参加したとのことである。

1870年1月12日、ナポレオン一族のピエール・ボナパルトに射殺されたジャーナリストのヴィクトル・ノワールの葬儀にブランキとブランキ派の軍事組織は武装して参加したが、軍事的衝突は不発におわった。

同年8月12日普仏戦争の混乱に乗じてブランキはひそかにパリに帰る。8月14日、ブランキ派はラ・ヴィレットの兵営に武器をもっておしかけ暴動への参加を呼びかけたが兵士たちは呼応せず、ブランキ派だけの武装行進のち解散。この暴動計画も失敗した。

9月4日、帝政の崩壊と国防政府の成立ののち、『ラ・パトリ・アン・ダンジェ』(*La Patrie en danger*, 祖国は危機に瀕す)紙を発刊して祖国防衛戦争を訴えたが、1871年3月17日、ブランキは、政府メンバーと暴動指導者とのあいだで結ばれた、1870年10月31日のパリ民衆市庁舎乱入事件についていかなる報復も追及もおこなわないという協定を踏みにじった欠席裁判にもとづいて、パリ・コミューン勃発の前日にまたもや逮捕される。コミューン側はヴェルサイユ政府にたいしてパリ大司教ダルボアや元裁判長ボンジャンを含む74人の政府側捕虜とブランキ1人との交換を申し入れたが、ブランキの影響力を恐れる政府側はこれを拒否した。

ブランキは、コミューン壊滅後、イギリス海峡に面した岩礁に築かれた

トーロー城塞監獄に入れられ、さらに軍事法廷で終身禁錮刑を受け、クレルヴォアの中央監獄に投獄された。8年あまりの獄中生活ののち、判決の取消しによる大赦法によってブランキが出所したのは、1879年6月10日であった。

こうして、ブランキは、その生涯において蜂起と投獄をくりかえし、1881年1月1日に脳溢血のため死去した。75歳と11カ月であった。彼の葬儀には実に10万人もの会葬者が列を連ねたという。

このようにその生涯を革命のための蜂起と投獄のくりかえしで過ごし、しかも、獄中で書きためて面会に来た家族にあずけてあった著作の原稿やノート類を1858年に母が死亡する直前に弟のジェロームに焼かせてしまっていて、そのこともあって、ブランキには、ルイ・ブランやピエール・ルルーのようなまとまったかたちで書かれた著作はほとんどない。

現存しているブランキの著作の大部分は、その折々に書かれた宣言、声明、所感、評論、論説、手紙、ノート等々の断片をもとにまとめられたものである。それは、近代社会についての経済・社会問題にかんする論稿としてまとめられた『社会批判』、革命的機運の熟しはじめた第2帝政末期の1868-69年頃に「パリの蜂起は、もはや今日、これまでの古いやり方では成功の見込みはない」として1848年6月の〈6月事件〉の教訓にもとづいて蜂起とバリケードによる市街戦のための技術的考察をおこなった『武装蜂起教範』、パリ・コミューンにあたって発刊された『ラ・パトリ・アン・ダンジェ』（祖国は危機に瀕す）紙に掲載したブランキの主要論説をまとめた『コミューンの烽火<sup>のうし</sup>』などである。それ以外に、ブランキ生存中に出版されたまとまった内容の著作として、1871年にパリ・コミューン直前に捕らえられ閉じ込められたトーロー要塞の陰鬱な獄房において責苦を逃れるために執筆し1872年2月に出版した『天体による永遠』がある。

## 2. 『社会批判』における「資本主義」語

ブランキがその著作のなかで「資本主義 capitalisme」という用語を使っているのは、『社会批判』<sup>4)</sup>のなかにおいてである。それは2カ所に見いだされる。

この『社会批判』は、ブランキ自身が自分の社会・経済問題にかんする論稿を死後に出版できるよう遅くとも1872年までにまとめたものにもとづいて、E. グランジェによって他の草稿を加えられて編集され、『社会批判』(La Critique Sociale, 2 vols, 1885, Paris.)として公刊されたものである。

構想されていた草稿の構成は、1「資本と労働」、2「奢侈」、3「高利の弁明」、4「共産主義——未来の社会」、5「断片」の5部からなり、これにプロローグが加えられるはずであったとのことである<sup>5)</sup>。だが、現行 Editions sociales 版(ES版)『オーギュスト・ブランキ選集』ではその構成も大きく変えられており、そこでは、まず、それなりのまとまった論述がおこなわれている1「高利」(1869-70)と2「共産主義——未来の社会」(1869-70)がおかれ、そのあと、個々の断片が、3「サン・テチェヌヌ、製造業者と労働者との戦い」(1849.10)、4「財産の起源」(1850)、5「分割主義者」(1850)、6「資本家的新聞」(1869)、7「サン・シモン主義者、知的信用」(1863.3.)、8「革命に対する資本の戦争……」(1866.6.)、9「乳幼児殺害、その原因たる神と資本」(1867)、10「演説草稿」(1867.8.)、11「ストライキと協同組合」(1867.10)、12「原始共産主義」(1869.4.)、13「協同組合と反動」(1870)、14「モラルなき経済学」(1870.3.)、15「工業の諸成果」(1870.6.)という見出しのもとに並べられている。なお、邦訳では、原書コピーにもとづいて省略が補われ、ブランキによる「序言」もつけ加えられており、構成も一部変えられている。

この『社会批判』については、ブランキ自身、「序言」の冒頭において、「この論稿は経済学にかんする専門的な論説ではなく、社会の諸問題につい

て一連の警見を与えたものである。したがって厳格に主題の連関を求める必要はない。論議が正当でありさえすれば、それらの順序はたいして重要でない<sup>6)</sup>と述べ、かつ、「本書は経済学の書ではなく、未来について問う一節をともなった、資本およびその母、高利にかんするモノグラフィーである<sup>7)</sup>」と指摘しているものであるが、それは近代社会のさまざまな問題点についての論評の羅列のかたちをとっており、全体としてまとまった論述がおこなわれたものとはなっていない。

そのなかで、ブランキは、1「高利」において、近代社会の現実における災厄をもたらしている事態について、「分業の結果、個人の独立はいやおうなく犠牲にされている」と、人間社会の歴史的発展のなかで人類は分業の発達によって個人の独立が犠牲にされることになり、それ以来社会は交換のうえに成り立つようになったとみなし、そのうえで、交換の媒介者としての貨幣がもたらした結果として、「貨幣のもたらしたサービスが非常に高くついた」のであって、「高利、資本家的搾取、およびその邪悪な娘たちたる不平等と困窮をつくりだした<sup>8)</sup>」ととらえているのである。

だが、ブランキは、このような災厄をもたらしている事態は、実は、不可避なものではなかったとみる。

というのは、「貨幣が誕生したとき、人間にはこの交換手段の使用方法が2つ与えられていた。1つは友愛であり、もう1つは利己主義である。公正をもってすればすぐさま総合的協同体<sup>アソシアシオン・アンテグラル</sup>が出現したのであるが、実際には略奪の精神が際限のない悲運を生みだし、人類の歴史を耕したのである」とみる。そのように、貨幣を利己主義の方向で使用するようになったため、そこにおいて「資本の蓄積は、協同組織<sup>アソシアシオン</sup>によってではなく、大衆を犠牲にし、少数者の利益のために個人的独占によっておこなわれた」のであって、「吸血鬼は容赦なき搾取に全身全霊を打ち込んだ。こうして高利は全世界の災厄となったのである<sup>9)</sup>」とみなしているのである。

そこから、ブランキは、労働者の政治権力の獲得による革命によって、資



本により労働が搾取されている近代社会の経済社会構造を「総合的協同体」としての共産主義に変革すべきであると考えて、革命の必要を主張したのである。

そのような把握にもとづきながら、ブランキは、つづく2「共産主義——未来の社会」において、協同組織にもとづく共同体的な共産主義体制と対比しながら近代社会の現実的事態を問題にし、そのなかで「資本主義 capitalisme」という言葉を次のように使っている。

「共同体的体制 (le régime communautaire) のもとでは、善は万民を益し、悪は誰をも益さない。豊作は祝杯をあげるべきものであり、不作は災難である。他人を害することで利益を得るものは誰もなく、他人にとって有用なことで苦しむものは誰もない。すべては正義と理性にのっっている。在庫は、工業や商業の恐慌を招くことなしに、放出できるであろう。現在では災害なしには不可能な製品の蓄積も、その逆に、製品の自然的劣化の他にはほとんど限界をもたないものとなるであろう。

たちの悪い草木が良い草木をおしのけて土地を占領してしまうことは、しばしばあるものである。儲けに貪欲な資本主義 (capitalisme) はいつも目を光らせていて、<sup>アシアシオン</sup>協同組織の領分を占拠してしまい、そのためこの進歩のためのすばらしい道具は、その手のなかで現実にはシャスポー式銃になってしまったのである。それは中小商工業を放逐するために用いられたのである。」<sup>10)</sup>

ブランキは、ここで、人間社会の歴史的発展のなかで「分業」の発達によって個々人は自立性をもちえなくなり、そのような個々人のあいだの社会的連関がとる「交換」とよっての「媒介者」としての「貨幣」の利用が、友愛にもとづく総合的協同体というかたちにおいてではなくて、利己主義にもとづく使用の仕方をされたため、その結果、略奪の精神が際限なく広がって

「高利、資本による搾取」がおこなわれ「不平等と貧困が誕生」することになった、としているのである。そして、そのことは、近代社会における社会的連帯にもとづく「協同組織の領分」であるべきものが「儲けに貪欲な資本主義 (capitalisme)」によって占拠されてしまったことによるものであるとしているのである。

ここでブランキが「資本主義」という言葉によって表現しているのは、本来は協同組織が占めるべき領域を占拠してしまっている近代社会のなかの「儲けに貪欲な」要因についてである。すなわち、そこにおける「資本主義」という用語は、近代社会の社会・経済体制そのものを示すものではない。それは、「協同組織の領分を占拠」する「儲けに貪欲な資本主義」(le capitalisme, *àpre au gain*) というかたちで使われているところからも明らかのように、「資本」そのものと同じものとして使われているのである。

ところで、ブランキは、この「共産主義——未来の社会」なる節のなかで、さらに、革命によってひきおこされる事態に関連して「資本主義」という用語を使っている。

「革命の翌日こそ芝居の山場である。かといって、急激な変化がおこるといわけではない。人や物事は昨日と同じである。ただ希望と恐怖とがそのところを変えるのである。鎖は断ち切れ、国民は自由になり、その前に果てしなき地平線が開ける。

そのときなにをなすべきであるか？ 1848年のときと同じように、昔と変わらぬ馬車にただ新しい馬をつけ替えるだけで、静かに昔と同じわだちを踏んでいくのか？ このわだちがわれわれをどこへ導くかは知っているとおりだ。これに反して、良識がついに支配的になるならば、ここで2つの平行した道をすすんでいくことになる。1つの道は各段階を一段一段と進んで普遍的総合教育に達し、今1つの道は前者の各段階に対応する段階を経て共同体に到達する。

この2つの道をすすむにあたってまずなすべきことは、障害物の破壊である。障害物とは何であるかは十分に知られているとおりである。まず黒服の軍隊、そして、その傍らには資本の陰謀。黒服の軍隊を第一線から立ち退かせる、これは簡単な仕事だ。資本はそれほど簡単にはいかない。人もすでに知っているとおり、資本がとる常套手段は逃げることに隠れることだ。そうしておいて、資本主義 (capitalisme) は窓辺に身をよせて、人民が溝のなかで右往左往するのを静かに眺めているのだ。1848年の状況はまさにこれであった。人民は唸り、嘆き、不平を言い、腹を立てたときにはもう遅すぎて、さんざんに打ちのめされ、武器を取りあげられてしまった。二度とこのようなことはくりかえすまい。

通貨が姿を消すのを押しとどめようなどというのは不可能なことだ！ そんなことは気にさえしなければいいのだ。通貨が消えたとして、動産や不動産は逃げも隠れもできないのだ。それで十分だ。もっとも急を要することにはまず手をつけるのだ。』<sup>11)</sup>

ブランキは、「教育と共同体とは顔をそろえてすすみ、どちらも一歩たりとも他に先んじることはできない」<sup>12)</sup>と、「普遍的総合教育」と「共同体」との両者の実現によってのみ共産主義をうち立てることができると強調している。

というのは、ブランキによれば、「共産主義なしには教育が普遍的なものとなることはありえず、教育なしに共産主義が普遍となることもありえない。共同体下の人間とは、誰も騙すことができず、誰も思いのままに引きまわすことができない人間である。一方、無知な人間はすべてカモであり、ぺてんの道具であり、奴隷であり、奴隷制度の道具である……」<sup>13)</sup>からである。

したがって、「共同体は啓蒙の光があまねくゆきわたり、一人として他人に騙されるような者がいなくなったとき初めて完成されたものとなるであろう。その暁には、誰一人として財産の不平等に苦しむことはなくなるだろう。と

ここで、この条件にかなうのは、他ならぬ共産主義のみなのである……」<sup>14)</sup>。すなわち、「共産主義は教育の全般的普及によって必然的に生まれるものであり、またそれなくしては生まれることのできないものである」<sup>15)</sup>。

そして、そのような共同体的な共産主義体制を実現するためには、労働者の武装蜂起にもとづいて革命権力を確立すると、ただちに普遍的総合教育と共同体的協同組織の実現にとっての障害物を取り除くことが緊急の課題になるとして、諸政策を提示しているのである。そこでは、とくに軍隊と経済については、緊急に次のような「即座に断行すべき措置」をとるべきであるとしている。

すなわち、政府としては「パリの独裁」としての革命的独裁をおこないながら、そのもつで、「中、上級官吏の即時免職」と「刑法および司法官職の廃止」とともに、まず軍隊については、「軍隊を廃止」し「男女を問わずすべての黒服の軍隊を追放」して、民兵制度による「国民自衛軍の創設」と「労働者および共和主義人民の全面武装」をすること。

そして、経済については、「1. すべての工業、商業主にたいし、雇用、賃金等、現在の状態を暫時そのままに据え置くよう命令を発すること。これを守らぬものは追放すること。国家はこれら雇用主と話し合いをつけること。命令を拒否して雇用主が追放された場合には、国家管理をもってこれに代えること」。「2. 関税、鉱山、大工業会社、信用、交換手段の問題を規制するための適切な会議の招集」。「3. 労働者協同諸組織の諸基盤を設定する任務を負う会議の開催」の3項目を挙げている。

経済にたいしてそのような緊急措置をとる必要性について、ブランキは、「雇用主にたいする国家命令により、資本の不意打ちは回避することができよう。これは最初になされねばならぬ絶対必要なことである。そうしなければ、労働者は溝のなかで新しい社会的方策を待つより仕方がなくなってしまうであろう」<sup>16)</sup>と、その緊急性を強調しているのである。

このように、ブランキは、革命権力が即座に断行すべき措置を提起してい

るのであるが、このことは1830年の7月革命と1848年の2月革命とにおいて、労働者、学生、小市民といったパリの民衆の蜂起と市街戦によってそれまでフランスを支配していた政治権力をうち倒しながら、その後の過程において結局のところ蜂起した民衆の要望は実現できず、ブルジョアジーによって政治的に取り込まれてしまったという、歴史的経験についての痛切な反省にもとづいているのである。

すなわち、7月革命は、1830年7月27日から29日にかけての労働者、学生、小市民などのパリの民衆の蜂起と国王軍とのあいだの市街戦によってブルボン王朝を打ち倒しながら、その「栄光の3日間」の帰結としては、その後、大銀行家ラフィットを中心とする自由主義的政治家たちの主導によってブルジョア王政としてのルイ-フィリップによる7月王政をもたらし金融貴族の支配へと結果することになってしまい、民衆の要望した共和制の実現は阻止されてしまったのである。

さらに、2月革命においては、1848年2月22日から24日にかけての労働者や学生を含む民衆のデモやバリケードによる政府軍との戦闘に勝利してルイ-フィリップを逃亡せしめ、社会主義者をも含む臨時政府を打ちたて、「労働者が労働によって生活できるように保障し、すべての市民に仕事を与える等々の義務を政府が負う」という〈労働権〉と〈生活権〉を保障する《布告》<sup>17)</sup>を臨時政府に出させている。

にもかかわらず、2月革命に不安を感じたパリの諸産業は休業状態となつて、多くの職種で50~80%の失業率となっている。そして、4月23日に強行された憲法制定国民議会の選挙によって選出された保守派やブルジョア派の多数の議会勢力のもとで、5月15日の労働者のデモの国会乱入事件を理由とした民衆運動のリーダーたちの大量逮捕と、そして、6月21日の「国立作業場」の廃止をめざす一連の措置に怒りを爆発させた労働者による示威運動とバリケードにたいする、議会に委任されたカベニャック將軍による戒厳令の実施と、地方から呼び寄せた6万もの正規軍によるバリケードへの直

接砲撃といった凄まじい戦闘がおこなわれた。そして、労働者側は、即時銃殺 1500 人など 4000 人の死者と約 1 万 5000 人の逮捕者を出して、徹底的に鎮圧されてしまうという、いわゆる〈6 月事件〉がひきおこされた。

その結果、2 月革命によって獲得した労働者の成果はその 4 カ月後には失われてしまい、事態はブルジョア共和派のもとでの政局の急速な右傾化と、ルーイナポレオン・ボナパルトの台頭をもたらすことになったのである<sup>18)</sup>。

そのように、民衆が力を発揮している革命的状況のもとにおいては、資本は、表舞台から逃避し、姿を消してひそかに事態を見まもっており、労働者を中心とした民衆が力をもたなくなってしまい方向を見失ってから再び姿をあらわすものであることを、ブランキは、「人もすでに知っているとおおり、資本がとる常套手段は逃げることに隠れることだ。そうしておいて、資本主義 (capitalisme) は窓辺に身をよせて、人民が溝のなかで右往左往するのを静かに眺めているのだ」と述べているのである。

すなわち、危機的な状況のなかで逃避した「資本」が形勢を観望している状況を「資本主義は窓辺に身をよせて、人民が溝のなかで右往左往するのを静かに眺めている」と表現しているのであって、そこで使われている「資本主義」とは「資本」そのものあるいは「資本家」のことを指すものであることは明白である。

そして、そのように革命的状況において逃避する「資本」にたいして、ブランキは、「通貨が姿を消すのを押しとどめようなどというのは不可能なことだ！ そんなことは気にさえしなければいいのだ。通貨が消えたとして、動産や不動産は逃げもかくれもできないのだ。それで十分だ。もっとも急を要することにまず手をつけるのだ」として、革命政府のなすべき措置は、逃げ隠れできない「動産」や「不動産」を押さえること、すなわち、「すべての工業、商業主にたいし、雇用、賃金等、現在の状態を暫時そのままに据え置くよう命令を発」し、さらに「関税、鉱山、大工業会社、信用、交換手段の規制」をおこなって「資本の不意打ちを回避」し、「労働者の協同組織の基

盤整備をおこなう」ことである、としているのである。

ここにおいてブランキが使っている「資本主義」という言葉は、先の文例の場合と同様に、社会経済体制にかんするものではなくて、「資本」そのものを意味するものであることは明らかである。

なお、邦訳のブランキ『社会批判』には、これ以外にも「資本主義」と訳されている個所が存在するが、それらは原書では「資本主義 capitalisme」ではなくて、「資本家的 capitaliste」という言葉が使われているものである。

たとえば、「人は社会主義にたいしてさらに要求を重ねる。人類にかほどの賜物をもたらし、現にもたらしつつある資本主義的教義は、せつかく養ってやった孤児が他の旗のもとに赴くのを見て、いたくお心をいためるというわけだ。資本主義的教義はその寂しさのあまり、若きライバル共産主義にたいし、未来の組織の詳細を教えてくれとか、気の向くままに考えだした未来の困難な問題のすべてを解決してくれとか、……催促するわけである」<sup>19)</sup>という叙述における「資本主義的教義」は原文では la doctrine capitaliste であって、「資本家的教義」である。

また、「1848年には2つの社会主義が存在し争っていたのだ。一方は無償相互信用という穏やかな個人主義に則るブルードンの社会主義、もう一方は漸進的一般協同体に基礎をおいた無名のものである。……どちらも資本主義専制にたいしては容赦なく戦ったし、地代、家賃、小作料、株のプレミアム等々あらゆる形態の利子の不当性を宣告したのである」<sup>20)</sup>における「資本主義専制」は原文では la tyrannie capitaliste (「資本家的専制」)であるし、また、「あらゆる日刊紙の背後には、暴力にあるいはジェズイット主義に訴えている公然たるあるいは隠然たる敵、資本主義の党派が控えている」<sup>21)</sup>における「資本主義の党派」の原語は la faction capitaliste (「資本家的党派」)である。

なお、S.モルニエ他著『コミュニューンの炬火——ブランキとブルードン——』所収のモルニエ『ブランキ』の翻訳には、それ以外にもブランキからの引用文のなかに「資本主義」という言葉が使われている。それは次のような文章に

おいてである。「資本は今日よりも将来さらに、よりいっそう強力な支配者となるであろう。資本主義は絶対的専制政治へ向かって巨人の足どりで歩んでいる。」<sup>22)</sup>「労働者に彼らの生産力の等価物を買うことを許さぬ資本主義の先取りの結果として、ここより、必然的に過剰が生じる。」<sup>23)</sup> そこでは、「資本主義」という用語が近代社会の経済制度をしめす意味あいをもった使われ方がされているが、しかし、このような文章が書かれている出典は明らかでないし、さらに、「資本主義」と訳されている言葉の原語も確定できない。

したがって、確定できるかぎりにおいては、ブランキにおける「資本主義」という言葉の使い方は、「資本」や「資本家」と同義のものとして使われているものであって、社会体制や経済制度の近代社会に特有のあり方をしめすものとしての規定的性格をもったものとはいえないものである。

このことは、「資本主義」という用語の使用ということにとって、他の国々にさきかけて1850年前後にフランスの社会主義者たちによって使われはじめた「資本主義」という新しい言葉が、1870年頃のフランスにおいてもなお、「資本」や「資本家」と同じものとして使われており、そこでは現在われわれが使っているような近代社会特有の特殊歴史的な社会形態や経済制度そのものを指すものとしての規定的意義をもつものとしては使われていなかった、という事例をしめすものである。

### 3. ブランキとマルクス

1805年生まれのブランキは、1818年生まれのマルクスよりも13歳年上であり、しかも革命運動への参加はマルクスよりもはるかに早く、1830年の7月革命では市街戦に参加している先輩である。そして、ドイツからフランスを経てイギリスでの亡命生活を送ったマルクスと、フランスでのくりかえしの投獄による“幽閉者”であったブランキとは、直接の接触の機会はあまり



なかったようである。

しかし、マルクスは、革命家としてのブランキにたいしては、敬意をこめて高く評価していたようである。

マルクスの著書、論文、書簡のなかで「ブランキ」の名前が出てくるのは、フランスにおける1848年の2月革命後の反動的巻き返しとしての6月事件からである。

マルクスは、1848年6月1日からケルンにおいて『新ライン新聞』を発行・編集しているが、それはまさに1848年革命の直後のことであり、フランスでは2月革命によって共和派と社会主義者とからなる臨時政府を打ちたてたパリの労働者、小市民の強力な力にたいしてブルジョア的支配のための巻き返しが強行されようとしている時期であった。

そのような状況のもとで、6月23日に始まる労働者のデモにたいする政府側軍隊による軍事力の強力な使用による殺戮的な鎮圧をもたらしたいわゆる〈6月事件〉にたいして、マルクスとエンゲルスは、事件が始まった直後の6月26日に、『新ライン新聞』に「パリからの報道」という記事を書き、その後も連日に報道をつづけながら、この事態は「ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの革命」<sup>24)</sup>であると特徴づけ、パリの労働者を力をこめて擁護している。

マルクスは、その後、1848年の2月革命と6月事件、1851年のルイ・ナポレオン・ボナパルトの反革命クーデター、そして1871年のパリ・コミューンと、19世紀のフランスをくりかえし襲った革命的激動と反動的ゆりもどしについて、『フランスにおける階級闘争 1848年から1850年まで』(1850年)、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』(1852年)、『フランスにおける内乱』(1871年)を書いている。

それらは、いわゆる唯物史観にもとづいて政治的社会的諸事件を経済的階級的基礎から明らかにしてそれらの諸事態の原因と性格を解明し、「歴史上の大事件がまだわれわれの目前で演じられている最中か、あるいはようやく

終わったばかりのときに、これらの事件の性格や意義や、その必然的な結果を明瞭に把握するという、驚くべき才能」<sup>25)</sup>をしめしたものである。

そのような解明のなかで、マルクスは、革命家としてのブランキについては、部分的な戦術的批判はともかくとして、一貫して高い評価を与えている。

1848年の2月革命から6月事件による労働者の敗北とそしてルイ・ボナパルトの登場前夜までの政治的諸事件を明らかにした『フランスにおける階級闘争』においては、次のような指摘がおこなわれている。

「プロレタリアートは、ますます革命的社会主義のまわりに、すなわち、ブルジョアジー自身がそれにたいしてブランキなる名称を考えだした共産主義の周囲に結集しつつある。この社会主義は、革命の永続宣言であり、階級差異一般の廃止に、階級差異の基礎であるいっさいの生産関係の廃止に、これらの生産関係に照応するいっさいの社会関係の廃止に、そしてこれらの社会関係から生じるいっさいの観念の変革に到達するための必然的な過渡点としてのプロレタリアートの階級的独裁である。」<sup>26)</sup>

マルクスは、そこでは、ブランキを「革命的社会主義」「共産主義」の代名詞であるかのようにみなすとらえ方を肯定している。

さらにまた、1851年12月のルイ・ボナパルトの反革命クーデターの原因を解明した『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』のなかでは、マルクスは、「ブランキとその同志たち、すなわちプロレタリア党の真の指導者たち」<sup>27)</sup>とといったかたちで、ブランキを「プロレタリア党の真の指導者」と評価している。

さらに、1870年代にいたっても、マルクスは、パリ・コミューンの性格と本質について分析した『フランスにおける内乱』のなかで、コミューン側がティエールの臨時政府にたいしてブランキ1人とパリ大司教を含む74人の

捕虜との交換を申し入れたのにたいして政府側が頑強に拒絶したことを詳しく述べながら、「コミューンは、大司教と、おまけにたくさんの司祭までつけて、当時ティエールの手には捕らえられていたブランキただ1人とを交換しよう、幾度も申し入れていた。ティエールは頑強に拒絶した。彼は、ブランキを渡せばコミューンに首領をあたえることになるが、他方、大司教は死体となってこそもっともよく彼ティエールの目的に役立つことを、知っていたのである」<sup>28)</sup>と、ブランキはパリ・コミューンの「首領」たる人物であると評価しているのである。

このように革命家としてのブランキについてのマルクスの高い評価は、1851年のロンドンにおける〈平和者の宴会〉でのブランキの「乾杯の辞」問題においても明瞭にしめされている。

この〈平和者の宴会〉なるものは、1851年2月24日、2月革命の3周年の記念日にロンドンでひらかれた国際的な示威のための集会であって、それは亡命フランス人たちのなかのルイ・ブランのグループとブランキ派のパルテルミ、アダンらとヴィリヒ=シャッパー派とが一緒に組織したものである。

宴会主催者からの要請によって、ブランキは、ベルイール=アン=メール=ブルターニュの牢獄から、この宴会にたいして「乾杯の辞」を送ったが、その「乾杯の辞」には、ルイ・ブランやその他の臨時政府の閣僚メンバーにたいする痛烈な批判がおこなわれていた。

それは、「人民にたいする警告」と題して、次のような文章から始まっている。

「明日の革命を脅かしているのは、どんな岩礁であろうか？ 昨日の革命がぶつかって難破した岩礁、つまり、人民の護民官をよそおう、仮装したブルジョアが得ている、嘆かわしい人望である。／ルドリュウ=ロラン、ルイ・ブラン、クレミュー、マリ、ラマルティエヌ、ガルニエ=パジェス、

デュボン(ド・ルール), フロコン, アルベール, アラゴ, マラスト! / 禍いに満ちた名簿だ! 民主主義ヨーロッパのあらゆる舗道のうえに, 血でしるされた不吉な名まえだ! 革命をほうむったのは臨時政府だ! あらゆる不幸の責任は彼らにかかっているし, 何千という犠牲者の死は彼らの責任なのだ! / 反動が民主主義を圧殺したのは, 自分のもちまへの仕事をやったにすぎない。罪をおかしたのは, 人民が信頼して指導者だと思ったのに, この人民を反動に引き渡した裏切り者どもである。……」<sup>29)</sup>

この「乾杯の辞」は, 宴会委員会の委員 13 名のかなり長い討論の結果 7 対 6 の賛否によって握りつぶされることになったものであるが, ブランキの友人たちによってそれはフランスのさまざまな新聞に発表された。

マルクスとエンゲルスは, ただちに, このブランキの「乾杯の辞」を序文をつけてドイツ語と英語に翻訳し, ドイツ語訳は 3 万部印刷してドイツとイギリスで配布している。エンゲルスは, さらに, 3 月 5 日に『タイムズ』編集者にあててこのブランキの「乾杯の辞」の英語訳を添えて手紙<sup>30)</sup>を出しているし, マルクスもまた, 『亡命者偉人伝』(1852 年 5-6 月に執筆)と『気高い意識の騎士』(1853 年 11 月 21-28 日頃執筆)のなかで詳しくその経緯について記し, 「ブランキが宴会主催者の要請に応じてベルイール [の牢獄] から送った乾杯の辞……」のなかで, ブランキは彼一流の簡潔な文章で 1848 年の臨時政府全体を, 宴会の主催者たるルイ・ブラン君をもふくめて弾劾していた<sup>31)</sup>と書いており, それを 1854 年にニューヨークでパンフレットとして出版している。

ところで, そのように, マルクスは, ブランキにたいして革命家, 社会主義者として高く評価しただけではない。マルクスは, ブランキの個人的な窮状にたいしても気にしていたようである。

ブランキは, 1859 年 4 月に 10 年の刑期が満了したが, それにもかかわらず再逮捕されてアルジェリアのマスカラの流刑者収容所に入れられ, 8 月に

なってやっと恩赦令により釈放されて自由の身となり、12月よりロンドンに旅行している。

そのあと、ブランキは、1860年6月にパリに帰ったが、1861年3月10日にまたもや逮捕され、秘密結社の首領であるという言いがかり的な告訴理由によって4年の禁錮と500フランの罰金を科されることになり、パリのマザース監獄に入れられて虐待行為を受け、さらにサント-ペラジ監獄で服役させられることになる。

そのような事態にたいして、マルクスは、1861年5月8日付けのラサール宛ての手紙のなかで、「ブランキは相変わらずマザース監獄(パリ)に在獄中だ。そこでは彼は、予審判事の命令で、憲兵その他によって、肉体的に虐待されている。彼は——陰謀計画などはなにももたずに——商人の手代としてここにきていたのであり、恩赦を利用して、ここからパリに出かけたのだ。イギリスその他のヨーロッパのやくざな新聞は、全事件をごまかそうとしている。……僕たちは、できればアーネスト・ジョーンズといっしょに、この奇怪事について大衆的な集会を開くつもりである」<sup>32)</sup>と書いている。

そこでマルクスが「彼〔ブランキ〕は——陰謀計画などはなにももたずに——商人の手代としてここにきていたのであり、恩赦を利用して、ここからパリに出かけたのだ」と書いているのは、おそらくブランキがロンドンに旅行にきてそしてパリに戻ったことを指しているものと思われるが、実際にそうなのかどうか確定的なことは明らかではない。さらに、そのときのブランキの事情をマルクスがどうして知っていたのか、これまたよく分からない。

ところで、マルクスは、同年7月1日付けのエンゲルス宛ての手紙のなかでは、「ブランキ事件では僕は彼女〔ハッツフェルト伯爵夫人。ラサールの女友達で支持者〕にブリュッセルから(ドノンヴィル〔本名、ルイ・ヴァト。ブランキの親友〕の手で)手紙を出させておいた。それは、まず第一に、あの——恥さらしな——ブランキ裁判についてドノンヴィルが書いたパンフレットを印刷するための資金にかんしている。ブランキ自身もドノンヴィルをつうじて僕

やドイツのプロレタリア党（海外在住の）の同情に非常に感謝した。われわれがフランスの徹底的に革命的な党とふたたび直接の結びつきをもつという事は、いいことだと思う」<sup>33)</sup>と書いていて、ブランキ自身もマルクスやマルクス派の海外在住のドイツ人の党による支援にたいして個人的にも感謝していることを明らかにしている。

そのようなマルクスのブランキにたいする個人的な気持ちは、11月10日付けのルイ・ヴァト宛ての手紙で、「フランスで、プロレタリアの党のことを、頭と心でつねに考えてきた人〔ブランキ〕の運命に、私ほど関心をもつものはいないということを確認してください」<sup>34)</sup>と書いているほどである。

そのようなマルクスとブランキとのあいだに、その生涯のなかで個人的に直接的な接触があったかどうかについては明確に言及された証言はない。けれども、個人的に会ったことがある気配はある。

ブランキは、パリのサントーペラジ監獄より病気で移されていたネッケル病院から1865年8月27日に脱走し、ブリュッセルに亡命する。

1865年10月29日から4日間、国際学生大会がベルギーのリエージュで開催されたが、大会参加者たちは閉会后ブランキを見舞っている。

ところで、マルクスは、1868年9月25日付けのエンゲルス宛ての手紙のなかで、「ブランキはブリュッセル大会中はいつも出席していた」<sup>35)</sup>と書いており、ブランキの個人的動向を気にしていることをしめしている。

このブリュッセル大会というのは1868年9月6-15日にひらかれた国際労働者協会（第1インターナショナル）第3回大会としてのブリュッセル大会のことである。だが、このブリュッセル大会にはマルクスは出席していない。

第1インターのブリュッセル大会に出席したブランキが、ブランキ派以外の人たちとどのような接触をもったのかは明らかでない。だが、ブリュッセル大会の半年ほど後の1869年3月20日付けのエンゲルス宛ての手紙のなかで、マルクスは、「モアランの特効薬については、今パリにいるブランキが非常にうまい冗談を言った。フランスはその偉大な人物たちにたいしていつ

も感謝したことがない、と」<sup>36)</sup>といったふうな個人的接触があったことを窺わせるような話を伝えたりしている。

さらに、マルクスは、1869年7月6日から12日まで次女のラウラの病氣見舞いのためにパリに行っているが、ロンドンに帰ってからエンゲルス宛てに書いた手紙のなかで「ル・プティ [ちび——ブランキのこと] はパリ (そこでは彼はあらゆる騒擾などに名を秘して出ていた) からブリュッセルに移っていた。そして、この事情のもとでは彼の不在は僕にとってけっして不都合ではなかった」<sup>37)</sup>と書いたり、翌1870年にパリのラウラと娘婿のポール・ラファルグ宛ての手紙のなかで、「ブランキはどうしている？ 彼はパリにいるのかな？」<sup>38)</sup>と書いたりもしており、個人的な親近感をこめた感じで気にしていることが分かる。

やがて、1871年3月18日政府の武力的奇襲に対抗したパリの民衆の蜂起によってパリ・コミューンが成立することになるが、ブランキは民衆蜂起の前日の3月17日に逮捕される。

ところで、パリ・コミューンが打ちたてられたばかりの同年の3月末に、フランスの保守的=君主主義的な日刊新聞『ル・ゴロア』(La Gaulois) に、パリ・コミューンはロンドンでマルクスがブランキたちと協議して組織したものであるという捏造記事が掲載され、それがロンドンの各紙をにぎわしている。

それにたいして、マルクスは、ただちに、『タイムズ』(4月4日付け掲載) や『デイリー・ニューズ』(4月6日付け掲載) に、それはまったくのでっち上げであるとして抗議のための公開の手紙を送っている<sup>39)</sup>。

この問題は、さらに、同年7月11日のマルクスからレオン・ビゴ (在パリ) 宛ての手紙 (草稿) においても取りあげられている。

レオン・ビゴ (Léon Bigot) は、フランスの弁護士で共和党左派の政論家であり、コミューン敗北後にヴェルサイユ軍事法廷でコミューンの戦士たちの弁護人をした人物であって、先の捏造新聞記事においてマルクス、ブ

ランキとともにパリ・コミューンについて共同謀議したとされているアシ (Adolphe-Alphonse Assi, フランスの機械工で、ブルードン左派。国際労働者協会パリ支部のメンバー、国民軍中央委員およびパリ・コミューン議員) についてのヴェルサイユ第3軍事法廷での裁判の弁護人であった。

このマルクスのビゴ宛ての手紙は、アシとマルクスとの関係についてビゴが国際労働者協会総評議会書記に宛てて問い合わせた手紙の返事として書かれたものである。

「私のものであるとされ、また私がおなかでアシ氏のことを話題にしているとされているあの手紙は、パリの諸新聞が私のものとしているすべての手紙同様、偽造であることを言明します。／私は、1回を除いて、私的にも公的にもアシ氏とかかわりをもったことはありません。3月18日革命〔パリ・コミューン蜂起〕の数日後、ロンドンの諸新聞がある電報を掲載しましたが、それによると、この革命は私がブランキ氏およびアシ氏とひそかに手を組んで準備したものである、ということになっていました。このふたりが私としめし合わせるためにロンドンへ来たというのです。私は当時すでに、これはすべてフランス警察のでっち上げたつくり話であることを、『タイムズ』紙上で言明しました。』<sup>40)</sup>

パリ・コミューンをマルクスとブランキが共謀してひきおこしたというのはまったく論外のでっち上げであることはいうまでもないところであるが、しかし、そのような捏造記事そのものはマルクスとブランキとの親密な間柄についての一般的な見方を反映しているところであろう。

なお、この手紙で、マルクスは、アシに会ったのは1回だけであると明言しているが、ブランキについては、それまでに会ったことがあるかどうかについてはまったくふれておらず、否定も肯定もしていない。

ところで、パリ・コミューンは、パリにつづいて打ちたてられた地方の諸



都市のコミュンがヴェルサイユ政府軍によって次々に鎮圧され、1871年5月21日に政府軍はパリに侵入をはじめ、「血の週間」と呼ばれる凄惨な市街戦ののち、5月28日にコムニオンは完全に鎮圧されてしまうことになる。この市街戦で市民たちの3万人が虐殺され、数万という市民たちはスイスへ、イギリスへ、アメリカへ亡命する。そして、4万3000人ももの市民たちが投獄され、うち3万6000人を超える人たちが起訴されて軍事裁判にかけられ、1万人あまりが死刑や無期流刑、強制労働、禁錮等の有罪判決を受けている。

この1871年のパリ・コムニオン壊滅ののちには、ブランキ本人は幽閉の身として政治の舞台から遠ざけられてしまい、マルクスも、パリ・コムニオンに取り組んだ『フランスにおける内乱』を1871年4月から5月にかけて書き上げたのちには、ブランキへの言及はほとんどなくなってしまっている。

これまで見てきたように、マルクスによるブランキにたいする評価は一貫して肯定的評価をしめしており、マルクスによるブランキにたいする否定的評価は基本的には存在していない。

ブランキにたいする批判的見解は、パリ・コムニオンののちの1870年代の半ば以降に、エンゲルスによっておこなわれたものである。

1870-71年の普仏戦争とパリ・コムニオンの敗北は、ヨーロッパの国際労働運動に大きな変化をもたらすことになった。

すでに内部分裂と抗争によって機能麻痺におちいていた第1インターは、最後の大会たる1872年のハーグ大会において、本部をアメリカに移すという提案をエンゲルスがおこなったのにたいして、バクニン主義者が反対しただけでなく、大会で全体としてはマルクス主義者を支持してきたブランキ主義者も、バクニン主義者にならって反対し、提案が可決されるとブランキ主義者は大会から退場し、以後第1インターから脱退する<sup>41)</sup>。

ところで、パリ・コムニオンの敗北後、ヨーロッパの労働運動の重点は、フランスからドイツに移ることになる。

ドイツにおいては、国家統一がおこなわれただけでなく、フランスからのアルザス、ロレーヌ両州の領土割譲と50億フランの賠償金の獲得のおかげもあって、重工業を基軸とした工業の急速な発達がおしすすめられた。そして、拡大する労働者階級を基盤にしながらドイツ社会民主党は急速な発展をとげ、しかも、1871年のドイツ帝国成立にともない実施された帝国議会の男子普通選挙権を利用して、社会主義鎮圧法が1878年に制定されたにもかかわらず、社会的な影響力のある強力な存在へと成長する。

そのような状況のなかで、エンゲルスは、ヨーロッパの民主主義運動および労働運動の新しい傾向の分析をおこなった連続論文『亡命者文献』(1-5)を1874年から75年にかけて執筆しているが、その第2論文は1894年に再録されるさいには『ブランキ派コミューン亡命者の綱領』という副題をつけられている。

そのなかで、エンゲルスは、「ブランキは、元来、政治革命家であり、人民の苦しみに同情を抱く、感情のうえだけの社会主義者であるが、彼は社会主義的理論ももたなければ、社会救済の一定の実際的提案ももっていない。その政治活動の面では、彼は元来『行動の人』であり、適当な時期に革命的急襲をこころみる、すぐれた組織をもつわずかな少数者が、最初の2,3回の成功によって人民大衆をひきつけ、こうして革命を成功させることができるという信念をいだく人であった」<sup>42)</sup>とみなして、「ブランキは過去の世代の革命家である」と断定している。

そのようなブランキにたいする「過去の世代の革命家」という判断は、新しい情勢のもとでの革命の新しい形態についてのエンゲルスの見解のうえに打ちだされたものである。エンゲルスは、そのことを、マルクスの『フランスにおける階級闘争 1848年から1850年まで』の1895年版への「序文」において、次のように述べている。

エンゲルスはいう。「[1848年の]2月革命が勃発したときは、われわれすべてのものが、革命運動の条件や経過についてのわれわれの考えにおいて、

それまでの歴史的経験に、特にフランスの歴史的経験に、とらわれていた」のであるが、しかし、「歴史はわれわれの当時の誤りを打ち破ったばかりでなく、プロレタリアートが闘争すべき条件を、すっかり変革してしまった。1848年の闘争方法は、今日では、どの面でも時代遅れとなっている」<sup>43)</sup>のである。

すなわち、「パリ・コミューンの敗北とともに、戦闘的なプロレタリアートも最終的にほうむりさられたかと、一般には思われた。ところがどうして、コミューンとドイツ＝フランス戦争をさかいとして、プロレタリアートの力づよい発展が始まった」のであって、全国民が軍隊に編成されたことと、未曾有の殺傷力と破壊力をもった強力な兵器によって「軍事全般が徹底的変革をとげ」てボナパルト式の軍事時代の急速な終末がもたらされたこと、それとともに、急速に増大する「社会主義政党」の成長と、そして、「普通選挙権の賢明な利用」によって、選挙がこれまでは欺瞞の手段であったのが解放の道具に変えられたのである、と。

そこから、エンゲルスはいう。かくして「闘争の条件が根本的に変わってしまったのである。あの旧式な反乱、つまり1848年まではどこでも最後の勝敗を決めたバリケードによる市街戦は、はなはだしく時代遅れとなった」のである、と。(なお、「将来において、市街戦はもうなんの役割も演じない、というのではない」と留保しながらであるが。)

そのように、ブランキは「過去の世代の革命家」であるというエンゲルスの判断は、たんに、ブランキの構想していた、一揆の暴動——軍隊的規律をもつ少数の意識的精鋭からなる秘密組織による武器をもつての襲撃——を起爆剤とする革命という組織論についての批判だけではない。

エンゲルスが指摘している「バリケードによる市街戦」が「最後の勝敗を決める」という「1848年の闘争方法は、どの面でも時代遅れとなっている」という革命形態についてのブランキ批判は、実は、マルクスをも含めてエンゲルス自身もパリ・コミューン以前にもっていたところの「われわれの当時

の誤り」でもあったものである、という自己批判をも意味しているものである。

ところで、これまで見てきたマルクスによるブランキ評価は、基本的には、社会主義者としての革命運動にかんするものであって、「資本主義」用語についてはいうまでもなく、経済理論にかんしての意見ではない。

マルクスが経済学にかんしてブランキに言及しているのは、マルクスの『哲学の貧困』によるブルードン批判についてのブランキの評価にかんするものが1点あるのみである。

マルクスは、1869年3月1日付けのエンゲルス宛ての手紙のなかで、次のように述べている。

「ブルードンに反対した僕の本〔『哲学の貧困』〕についてラファルグは次のように書いています。／『ブランキはその本を1冊持っていて、彼の友人たちのみなにそれを貸しています。たとえばトリドンはそれを読んで、どんなにモール〔マルクス〕がブルードンをやつつけたかを知って喜んでます。ブランキはあなたにたいしてたいへんな敬意を抱いています。……』」<sup>44)</sup>

それにたいして、エンゲルスは、「ラファルグがブランキについて書いていることは、たいへん結構だ」<sup>45)</sup>と返事している。

なお、『マルエン全集』「人名索引」のブランキの項には「(23)293」として『資本論』第1巻の第4編第10章「相対的剰余価値の概念」のなかの(注)についての指定がなされているが、そこでマルクスが引用している『1848年におけるフランスの労働者階級について。ブランキ氏著』(“Des classe ouvrières en France, pendant l'année 1848. Par M. Blanqui”)のブランキは、この革命家のルイ・オーギュスト・ブランキではなくて、その兄で経済学者のジェローム・アドルフ・ブランキ(Jérôme-Adolphe Blanqui, 1798-1854)のことである。この調査

報告については、河野健二編『資料 フランス初期社会主義 2月革命とその思想』(1979年、平凡社)に、その一部がジャン・アドルフ・ブランキ「リール市とノール県の労働者階級」として所収されている。

## II. 19世紀後半の「資本主義」語

### 1. 19世紀後半期の諸文献

19世紀半ばの1850年前後に、ピエール・ルルーヤルイ・ブランやサッカーたちが「資本主義」という言葉を初めて使用した後、この「資本主義」という用語は19世紀の後半期にはいささか散発的なかたちで1870年代以降に広がっていったようである。

デュボアの『フランスにおける政治的・社会的用語集』は、ピエール・ルルー『マルサスと経済学者たち』(1848年)以後において「資本主義」という用語を使っている著書として、次のような諸文献とそこでの使用例を挙げている<sup>46)</sup>。

1869年 A. ブランキ『社会批判』(A. Blanqui, *Crit. soc.*, 164.)

「資本はそれほど簡単にはいかない。人もすでに知っているとおおり、資本がとる常套手段は逃げることに隠れることだ。そうしておいて、資本主義は窓辺に身をよせて、人民が溝のなかで右往左往するのを静かに眺めているのだ。」

1870年 V. アーノルド『革命党の設立について』(V. Arnould, *De la constitution d'un parti révolutionnaire*, 17.)

「彼らの安全な財産は、大資本主義に依存した有給雇用者を小作農民が維持することに利益を有するであろうか？」

1870年 『レ・ミゼラブル』誌 (*Le Misérable*, 28 févr., 2 col., 1.)

「そんなに長いあいだ資本主義によって抑圧された後の、今後の仕事……」

1871年 J. デュボア 『社会的危機』 (J. Duboul, *La Crise sociale*, 61.)

「一定の言葉の魅力に抵抗するということにかんして、そのさまざまな面における問題をとらえるのに、あまりに狭い知性とあまりに少ない教養ではぞっとする荒廃をつくりだす、という逆説と詭弁がある。《集産主義》、《寄生的資本主義》、《連合組織》、《自立的自治体》、《信用支払いからの絶対的課税控除》、《社会的清算》といった言葉が、この仲間である。」

1871年 E. フェルメシュ 「革命的小品」 (E. Vermesch, *Opuscles révolutionnaires*, No 4, *La Grève*, 13.)

「資本主義にとっては、賃金の基準におけるあらゆる修正は生存価格の変動における直接的訂正となる……」

1872年 M. ブロック 『ドイツにおける社会主義の理論家』 (M. Block, *Les Théoriciens du socialisme en Allemagne*, 48.)

「《資本主義》(この言葉を持ち出すためにはみずから解決することが必要である)を支持して不公平に示すことをしないで……」

また、*Oxford English Dictionary* は、サッカー 『ニューカム家の人びと』 (1853-55年) 以後の英語での文献として、次のようなものを挙げている<sup>47)</sup>。

1877年 デューイ 『より良き時代』 (A. Douai, *Better Times*, 10.)

「私的資本主義のこの制度は比較的最近の起源のものである」

1884年 『ポール・モール』 誌 (*Pall Mall G.* 11 Sept. 6/1, 1884.)

「原始的キリスト教的共産主義にそっと入り込む資本主義のための抜け穴」

また、パツウは、『資本主義——概念的・術語的研究——』において、「資本主義」語を使った初めての文献としてはフランスにおけるルイ・ブランの『労働組織』(第9版)を挙げながらも、それ以後の文献としては、ゾンバル

ト『近代資本主義』第1巻(第1版, 1902年)をめぐるドイツ語系の文献を中心に取りあげている。しかし, パッソウの取りあげている広範な文献のなかには, 1902年のゾンバルトの著書の出版以前のものもあり, またドイツ語以外のものもあるので, そのなかの早い時期のものなかから出版年次の明示されているものを, いくつか年次順にとりあげてみると, 次のごとくである。

1870年 シェフレ『資本主義と社会主義』

Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus*, 1870.

1881年 G. ラティンゲル『政治経済学の道徳的基礎』

G. Ratzinger, *Die Volkswirtschaft in ihren sittlichen Grundlagen*, 1881.

1888年 イエズス会員コスタ-ロセッティ『国民経済学の一般的基礎』

Jesuit Costa-Rossetti, *Allgemeine Grundlagen der Nationalökonomie*, 1888.

1891年 M. リベラトーレ(イタリーのイエズス会員)『政治経済学原理』(翻訳)

M. Liberatore (italienische Jesuit), *Grundsätze der Volkswirtschaft*, (Deutsche Übersetzung) 1891.

1891年 G. F. クナップ「世襲的臣従関係と資本家的経済」(『立法, 行政および国民経済年報』第2号)

G. F. Knapp, "Die Erbuntertänigkeit und die kapitalistischen Wirtschaft" (*Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft*, Heft 2, 1891.)

1892年 ベンゼル「真の資本主義と悪しき資本主義」(『キリスト教的社会改革月刊誌』)

Wenzel, "Wahrer Kapitalismus und Falscher Kapitalismus" (*Monatschrift für christliche Sozialreform*, Jahrgang 1892.)

1892年 シャインブルッフ「真の理想主義の光に照らしての暴利資本主義の概念」(『キリスト教的社会改革月刊誌』)

- Scheinpflug, “Begriff des wucherischen Kapitalismus im Lichte des realen Idealismus” (*Monatsschrift für christliche Sozialreform*, Jahrgang 1892.)
- 1894年 ルドルフ・マイアー『世紀末資本主義』  
Rudolf Meyer, *Der Kapitalismus fin de siècle*, 1894.
- 1895年 レール-フランケンシュタイン『国民経済における生産と消費』  
Lehr-Frankenstein, *Produktion und Konsumtion in der Volkswirtschaft*, 1895.
- 1898年 ルーエル「資本主義の発生」(『エコノミスト・ジャーナル』)  
Rouxel, “La genèse du capitalisme” (*Journal des Economistes*) 1898.
- 1901年 ワルター「資本主義の本質と歴史について」(『社会評論』)  
Walter, “Über Wesen und Geschichte des Kapitalismus” (*Sozial Revue*) 1901.
- 1902年 W. ノイラス「資本主義」(『国民経済・統計年報』第79巻)  
W. Neurath, “Der Kapitalismus” (*Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. 79, 1902.)
- 1904年 G. トラウブ『道徳と資本主義』  
G. Traub, *Ethik und Kapitalismus*, 1904.
- 1905年 F. J. シュミット「資本主義とプロテスタントイズム」(『プロシヤ年報』第122号)  
F. J. Schmidt, “Kapitalismus und Protestantismus” (*Preußische Jahrbücher*, Bd. 122, 1905.)
- 1911年 A. ライスト『19世紀における私法と資本主義』  
A. Leist, *Privatrecht und Kapitalismus im 19. Jahrhundert*, 1911.
- 1911年 K. ビーレフェルト『農業における資本主義の浸透』  
K. Bielefeldt, *Das Eindringen des Kapitalismus in die Landwirtschaft*, 1911.



## 2. 「資本主義」語の普及

デュボアやパツソウや OED が取りあげているフランス、イギリス、ドイツにおける著書・論文を見るかぎり、「資本主義」という用語は、1870年代までは、主としてフランスのそれも社会主義関連の文献において使用されているが、イギリスにおいては、1880年前後に、若干の使用例が出てくる。

それにたいして、ドイツにおいては、主として1880年代以降になって「資本主義」という用語をもちいた著作が出てくるようになってきている。そのようなドイツにおける「資本主義」語の使用について、パツソウは、1867年のマルクス『資本論』第1巻の出版を契機として「資本主義」という用語が使われるようになった、と述べている。

すなわち、パツソウは、『資本主義——概念的・述語的研究——』において、「資本主義」という用語を使った最初の文献としてルイ・ブランの『労働組織』(第9版, 1850年)を挙げながら、その後の文献としては、マルクスの『資本論』第1巻(1867年)に言及したうえで、マルクスのもたらした影響によって「資本主義」や「資本家的生産様式」といった用語が流行語になったとしながら、その影響はまずシェフレの『資本主義と社会主義』(A.E.F. Schaffle, *Kapitalismus und Socialismus*, Tübingen, 1870.)において打ちだされたとして、次のように指摘している。

「ドイツにおいては、カール・マルクスが彼の『資本論』において〈資本家的生産様式〉を叙述の対象として以来、上述の〔資本主義、資本家的生産様式といった〕表現は大いに普及してきた。資本主義、資本家的生産様式等々がやがてさまざまな言いまわしによる極度の流行語になったのは、主にそこからきたものである。われわれの国では、その普及にはおそらくシェフレの本『資本主義と社会主義』の書名が重要な貢献をしている。

シェフレはマルクスとラサールに深く影響されている。]<sup>48)</sup>

そのように、1867年に刊行されたマルクスの『資本論』第1巻に大きな影響を受けたシェフレによって、1870年に、書名そのものに「資本主義」(Kapitalismus)という言葉を使った『資本主義と社会主義』(Kapitalismus und Socialismus)なる書物が出版され、「資本主義」という用語は世に広がることになった、というのである。

すなわち、ドイツでは、マルクス『資本論』の影響を受けたシェフレの『資本主義と社会主義』(1870年)を中継のステップとしながら、「資本主義」「資本家的生産様式」といった用語は1880年代にはいつてから次第に普及していくようになり、そのうえで、1902年に、ゾンバルトによって、『近代資本主義』第1巻(第1版)(W. Sombart, *Der moderne Kapitalismus*, Bd. 1, Leipzig, 1902.)という、これまた書名に「資本主義」(Kapitalismus)という用語を組み入れた著作が出て、これが一世を風靡し、それとともに「資本主義」という用語もすっかり普及することになった、とパツソウはいうのである。

「より新しい時代においては、《資本主義》等々の表現はとくにゾンバルトの大きな著作『近代資本主義』(この本のとくに最初の版はマルクスに非常に大きく影響されている)によって、世におこなわれるようになり、事態をより十分に表現するならば流行となったのである。その本の出現以来、科学的文献においてもまたこれらの表現がいくつかの分野において広がっている……。]<sup>49)</sup>

そのうえで、パツソウは、「資本主義」という用語を使用したり問題にしたりしている諸文献について広範に渉獵し、その内容の点検をおこなっている。

ところで、パツソウ自身は、「資本主義」「資本家的生産様式」といった用

語にたいしてきわめて批判的な見解の持ち主である。

すなわち、パツソウは、「資本主義」「資本家の生産様式」といった用語は、さまざまな異なる意味において使われているという多義性と、概念としての明確な規定性が明らかでないという不明確性と、そして、社会主義的な煽動的な演説などで用いられて近代的な経済組織を否定しようとする感情的で倫理的な拒否感を底意としてもっているというイデオロギー性をもったものであって、そのような「資本主義」という用語は科学的な用語としては不適切なものである、とみなしている。

そのため、国民経済学においては、そのような「資本主義」「資本家の生産様式」といった用語はまったく不人気であって、その使用にたいしては異議が続出して拒否的傾向が強い。だから、経済学の科学的文献においては「資本主義」といった用語はほとんど使用されなかった、とパツソウは詳細な文献考証にもとづきながら主張するのである。

そのように、経済学においては「資本主義」や「資本家的生産様式」という用語はほとんど使用されなかったが、しかし、ドイツにおいても、社会主義的文献においてのみならず、歴史家や法学者や神学者たちには「資本主義」という用語は積極的に受け入れられて使用されてきた、とパツソウはいう。

すなわち、「資本主義」という用語は、近代社会の経済システムを矛盾と対立をもたらす変革されるべき社会体制であると理解する社会主義者によって使われただけでなく、さらに、それ以外にも、利殖をめざして貸金利子の取り立てをおこなう高利貸しを罪あることとみなしているカトリックの立場に立つ神学者たちや、あるいは、人間社会の歴史的諸形態や社会の歴史的な変遷を把握しようとする歴史家たちや、さらには、法的諸制度を社会の経済関係の歴史的特徴と関連づけながら把握しようとする法学者たちによって、近代社会の経済関係の特徴をとらえようとするなかで「資本主義」という用語の使用は広がっていった、としているのである。

[注]

- 1) 重田澄男「ルイ・ブランと「資本主義」——「資本主義」語のはじまり(1)——」(『岐阜経済大学論集』第33巻第2号, 1999年9月)。同「ピエール・ルルーとサッカー——「資本主義」語のはじまり(2)——」(同上, 第33巻第3号, 1999年12月)。
- 2) J. Dubois, *Le vocabulaire politique et social en France de 1869 à 1872*, Paris, 1962, p.238.
- 3) ブランキの人物と社会的活動については、ブランキ『革命論集』改訂増補版(加藤晴康編訳, 彩流社, 1991年)における「ブランキ年譜/著作・文献目録」, および, M. アバンスール/V. プロス編『A. ブランキ 天体による永遠』(浜本正文訳, 雁思社, 1985年)の付録2「M. ドマンジェと「ブランキ監獄年表」」ならびに「訳者解説」, ジェフロワ著『幽閉者 ブランキ伝』(野沢協・加藤節子訳, 現代思潮社, 1973年), S. モルニエ他著『コミューンの炬火——ブランキとブルードン——』(栗田勇・浜田泰三訳, 現代思潮社, 1963年), 小牧近江『ジャコパンの精神』(鹿砦社, 1979年)等に拠っている。
- 4) A. Blanqui, *La Critique Sociale. Auguste Blanqui Textes Choisis. Les Classiques du Peuple*, 1971, Paris. ブランキ『社会批判』(加藤晴康訳『ブランキ 革命論集』彩流社, 1991年, 所収)。
- 5) 同上『ブランキ 革命論集』「訳注」431-432ページ。
- 6) 邦訳『社会批判』145ページ。なお, フランス語原書には「序言」は載せられていない。
- 7) 同上, 146ページ。
- 8) A. Blanqui, *op. cit.*, pp.140-143. 邦訳147-150ページ。なお, 訳文は一部変えている。
- 9) *Ibid.*, pp.143-144. 邦訳151-152ページ。
- 10) *Ibid.*, p.147. 邦訳158-159ページ。
- 11) *Ibid.*, pp.163-164. 邦訳183-184ページ。
- 12) *Ibid.*, p.163. 邦訳182ページ。
- 13) *Ibid.*, p.148. 邦訳161ページ。
- 14) *Ibid.*, p.152. 邦訳166-167ページ。
- 15) *Ibid.*, p.154. 邦訳169ページ。
- 16) *Ibid.*, pp.164-165. 邦訳184-185ページ。
- 17) マルクス『フランスにおける階級闘争 1848年から1850年まで』『マルクス=エンゲルス全集』第7巻, 16ページ。MEW-7, S.18.
- 18) 労働者たちが臨時政府に「労働権」と「生活権」を保障する布告を出させたのを

受けて、国民議会が起草していたフランス共和国憲法草案にふくまれていた人民の権利義務のなかには、「第7条 労働の権利は、社会のおのおのの成員が労働によって生活する権利である。したがって、他に仕事を得る方法をもたないすべての健康な個人に仕事を供給することは、社会の義務である」という労働権があったが、この労働権の条文は、〈6月事件〉のあと、「第8条 扶助を受ける権利は、孤児、痲疾者、および高齢者が国家の手で扶養される権利である」という扶養権の条文ならびに「第6条 教育を受ける権利」と併せて取り除かれている。(マルクス「1848年11月4日に採択されたフランス憲法」『マルエン全集』第7巻、502ページ。MEW-7, S.494.)

- 19) A. Blanqui, *op. cit.*, p.156. 邦訳 172 ページ。
- 20) *Ibid.*, p.182. 邦訳 211 ページ。
- 21) *Ibid.*, p.178. 邦訳 226 ページ。
- 22) S. モルニエ『ブランキ』(S. モルニエ他著、栗田勇・浜田泰三訳『コミュニューンの炬火——ブランキとブルードン——』1963年、現代思潮社、所収) 86 ページ。
- 23) 同上、87 ページ。
- 24) 「パリからの報道」[『新ライン新聞』1848年6月27日付け、第27号]『マルエン全集』第5巻、111 ページ。MEW-5, S.116.
- 25) エンゲルス『フランスにおける内乱』(1891年版)の序文『マルエン全集』第17巻、584 ページ。MEW-17, S.615.
- 26) マルクス『フランスにおける階級闘争 1848年から1850年まで』『マルエン全集』第7巻、86 ページ。MEW-7, S.89-90.
- 27) マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』『マルエン全集』第8巻、114 ページ。MEW-8, S.121.
- 28) マルクス『フランスにおける内乱』『マルエン全集』第17巻、337 ページ。MEW-17, S.359.
- 29) 『補録』[「L.A. ブランキの乾杯の辞のドイツ語訳への」まえがき] [付、あいさつの全文]『マルエン全集』第7巻、578-580 ページ。MEW-7, S.568-570.
- 30) エンゲルス『「タイムズ」編集者への手紙』『マルエン全集』第7巻、475-477 ページ。MEW-7, S.466-467.
- 31) マルクス『気高い意識の騎士』『マルエン全集』第9巻、505 ページ。MEW-9, S.515.
- 32) 「マルクスからフェルディナント・ラサール [在ベルリン] へ」(1861年5月8日)『マルエン全集』第30巻、488 ページ。MEW-30, S.603.
- 33) 「マルクスよりエンゲルス [在マンチェスター] へ」(1861年7月1日)『マルエン全集』第30巻、144 ページ。MEW-30, S.176.

- 34) 「マルクスからルイ・ヴァト（在ブリュッセル）へ」（1861年11月10日）『マルエン全集』第30巻，499ページ。MEW-30, S.617.
- 35) 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）へ」（1868年9月25日）『マルエン全集』第32巻，131ページ。MEW-32, S.165.
- 36) 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）へ」（1869年3月20日）『マルエン全集』第32巻，223ページ。MEW-32, S.284.
- 37) 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）へ」（1869年7月14日）『マルエン全集』第32巻，266-267ページ。MEW-32, S.337.
- 38) 「マルクスからラウラおよびポール・ラファルグ（在パリ）へ」（1870年3月5日）『マルエン全集』第32巻，541ページ。MEW-32, S.656.
- 39) マルクス『『タイムズ』編集者へ』〔『ザ・タイムズ』1871年4月4日付，第27028号〕『マルエン全集』第17巻，280-281ページ。MEW-17, S.302.
- 40) 「マルクスからレオン・ビゴ（在パリ）へ」（1871年7月11日）『マルエン全集』第33巻，203ページ。MEW-33, S.244.
- 41) W. Z. フォスター『三つのインタナショナルの歴史』1957年，大月書店，108ページ。
- 42) エンゲルス『亡命者文献 2 ブランキ派コミューン亡命者の綱領』『マルエン全集』第18巻，522ページ。MEW-18, S.529.
- 43) エンゲルス『『フランスにおける階級闘争』（1895年版）への序文』『マルエン全集』第22巻，507-523ページ。MEW-22, S.509-527.
- 44) 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）へ」『マルエン全集』第32巻，208-209ページ。MEW-32, S.264.
- 45) 「エンゲルスからマルクス（在ロンドン）へ」『マルエン全集』第32巻，213ページ。MEW-32, S.270.
- 46) J. Dubois, *op. cit.*, p. 238.
- 47) *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., 1989, Vol. II, p. 863.
- 48) Richard Passow, "Kapitalismus" *Eine begrifflich-terminologische Studie*, Jena, 1918, S. 2-3.
- 49) *Ibid.*, S. 3.